4回高知出版学術

3月20日 高知市

高知出版学術賞特別賞の受賞あいさつをする白岩英樹さん＝高知市で3月

白岩英樹（しらいわ・ひでき）　大阪芸術大大学院芸術研究科博士後期課程修了、2020年に高知県立大文化学部准教授。25年4月から教授。「ぼくらの『アメリカ論』」は、奈良県東吉野村で私設図書館「ルチャ・リブロ」を運営する青木真兵さん(41)、米国での生活が長かった建築家の光嶋裕介さん(46)と白岩さんの3人が23年10月から24年6月にかけて、それぞれの視点から「アメリカという国とは何なのか」を考え、インターネット上でリレー連載した内容をまとめた書籍。高知出版学術賞（高知市文化振興事業団主催）の特別賞講評では「2024年の選挙結果を受けて我々が迫られる『アメリカ』に対する理解に新たな奥行きを与える挑戦」と高く評価された。

政治、経済、人権…アメリカに生まれた格差――

内側に「潜り」自国と比較を

高知県立大 白岩教授に聞く

全面発動した相互関税の一部について、90日間の一時停止を発表するなど、世界はトランプ大統領が率いる米国に振り回されている。2024年10月に出版された「ぼくらの『アメリカ論』」（夕書房）では、大学教授、建築家、私設図書館の運営者という立場の異なる日本人3人が「アメリカという国は何なのか」を考え、25年3月に「第34回高知出版学術賞」の特別賞に選ばれた。2期目の大統領に就任したトランプ氏が過激な政策変更を矢継ぎ早に打ち出す中、執筆者の一人である高知県立大の白岩英樹教授(49)に、出版後の「それからの『アメリカ論』」について聞いた。【聞き手・小林理】

――この書籍で語られた「アメリカ論」が古く感じられるほど、トランプ政権下で急速に米国の姿が変えられているように感じます。

◆「ぼくらの『アメリカ論』」で、私は米国の政治、経済、人権について語りました。トランプ政権では、民主党政権時代から蓄積していた政治・経済のひずみが、まるで地殻変動のように一気に表面化しています。人権については、大きく後退しています。

オバマ、バイデンの民主党政権は、格差を是正する構造改革を行わず、その状態が長年続いていました。苦境にあえぐ多くの人が、「努力すれば誰でも成功できる」というアメリカンドリームと現実は違うと気づき始めたのです。頑張って働いてもわずかな稼ぎしか得られない。一方、ウォールストリート（金融街）の人々は、1日で巨額のカネを手にする。この格差を生み出す構造は一体誰が作ったものなのか、と。

――トランプ氏の政策や主張は、実は以前から米国社会の中に潜んでいた。

◆そう思います。オバマ政権は費用負担が耐えられないと「世界の警察をやめる」と宣言しました。その方針はトランプ氏に引き継がれました。オバマ氏が「尊厳」や「倫理」という言葉で隠しながら実行したことを、トランプ氏は「国としてもうかるか」を基準として実行したわけです。

――民主党の支持基盤と思われていた経済的弱者や差別を受けやすい人々の間にもトランプ氏支持が広がったのはなぜでしょうか。

◆民主党に任せても生活は良くならなかった。ならば、リスクがあっても自分たちに「誇り」を与えてくれると思わせる大統領に懸けてみよう、と考えたのだと思います。移民排斥運動が盛んな地域は移民が少ない地域です。見えないものに対して、「闇の中に敵がいる」と恐怖をあおる。これは、アメリカがかつて先住民に対して行ったことと、本質的には同じです。対話ではなく、駆逐が行われています。

――それらの行動の底にあるものが「アメリカ・ファースト」という自国や自分が最優先という価値観では？

◆本当は国家や組織は成員の全員が快適だと感じる時に最大のパフォーマンスが得られます。しかし、個人の価値観が優先されると、目の前の相手に勝つことが最優先になる。「勝っている」人に協力して、勝者の側に立とうと思う。それはあくまで幻想なのですが。

――「アメリカ・ファースト」ではうまくいかない？

◆コミュニティーや公益がなければ、個人の楽しみを最大化できません。例えば、いい車を買っても、道路がガタガタだったらドライブは楽しめません。そこに立ち返らなければいけない。

今、アメリカの多くの人が、南北戦争の時のように敵と味方に分けてあおる人になびいている。人類が歩んだ愚かなわだちを「メーク・アメリカ・グレート・アゲイン」というスローガンのもとに再び歩こうとしているように見えます。それに対しては「それは昔のわだちと一緒だよね」「もう一回あの泥道を歩きたい？」と確認するしかない。地道だけど、それしかない。その声を支えるものが、教育であり、文芸や芸術なのだと思います。

――「アメリカ論」を日本で考えることにどんな意義があるのでしょうか。

◆自分たちの国と比較して同じところと違うところ、見習うべきことと見習ってはいけないこと、それらを学ぶことで、回避すべきルートが浮き彫りになります。

研究のためには「潜る」ことが必要です。目的地に行く時、表面をヒュッと飛行機で飛ぶのではなく、地下道を掘って裏側に出る感じです。飛行機では途中の風景は見えないけど、地下道を掘れば、自分たちがどういった人たちを踏み台にしたり、見ないようにしたりしてきたかが体感できる。外国の文化研究が目指す到達点は、まさにそこにあるのだと思います。

――これからのアメリカの希望をどこに見いだしていますか。

◆アメリカの内側に潜り込んで、今も表現活動を手放さない人がいること。それだけでも希望と呼ぶには十分です。例えば、黒人奴隷を支援者がひそかに逃がす話を基にした「地下鉄道」を執筆したコルソン・ホワイトヘッドは2回もピュリツァー賞を受賞しています。即時的で断片的なSNS(交流サイト)が社会のリズムを支配する時代にあっても、いわゆる「オールドメディア」のプロフェッショナルな人たちの仕事が評価されていることに希望の光を見ます。たとえ少数であっても、どんなに時間がかかったとしても、異なる文化の間に地下道を掘る人たちがいる限り、その光が消えることは絶対にないのです。

「ぼくらの『アメリカ論』」を執筆した白岩英樹さん（左）、光嶋裕介さん（中央）、青木真兵さん＝高知県南国市で

2025年4月16日（水）　毎日新聞掲載記事